

シニア犬のケアと介護

Happy Dog Lifeを考える

横山 恵理 (キュティア老犬クリニック)

第1回 シニア期以降の健康管理 ～楽しく過ごすためのコツ～

はじめまして。「キュティア老犬クリニック」という、東洋医学を取り入れた二次診療病院で診察を行っています。当クリニックに相談にいらっしゃる飼い主さんからよく耳にするのが、「先生に聞いても“もう年だから”としか言ってもらえなくて」というお言葉。

近年、フードや医療技術の進歩により、飛躍的にペットの寿命が延びてきています。そこに室内飼育がメインとなり、オーナーさんとペットとの距離が近くなったことも加わり、病気になる前のシニア生活のサポートへの需要が高まってきています。

人間のお医者さんと違い、我々獣医師は病気を治

すだけでなくパピーケアから始まる動物の飼育指導も業務の一環となっています。そして、そのことがオーナーさんとの信頼関係を築く一助となっているのは間違いありません。そんな信頼する先生に「年だから仕方がない」と言われてしまうことは、オーナーさんにとって不安や焦りを抱かせてしまう一因になっているようです。

人間と同様、犬も年をとることで日々の生活でのちょっとしたケアが必要となってきます。飼育指導の一環として、年齢に応じたシニアケアも取り入れてみてはいかがでしょうか？

なにはなくとも温活！

13歳を超えたような老犬はもちろん、7歳前後のプレシニア期に入ったらまず気を付けなければならないのが「下半身の冷え」です。

一般的には「犬＝暑がり＝シニア期は熱中症になりやすい」のイメージが強く、「何言ってんのこの人？」と思うかもしれません。でも、実際のところ、この熱中症ですら下半身の冷えと無関係ではないのです。

中医学では、中国古代哲学の五行論学説(図1)を基本として身体のバランスを判断しています。その中でも加齢による影響を強く受けるのが「水＝腎」であり、その衰えによって腎臓のツボがある第2腰椎より下に気が行き渡らなくなってくると考えられています。そのために下半身が冷えてしまい、足腰の

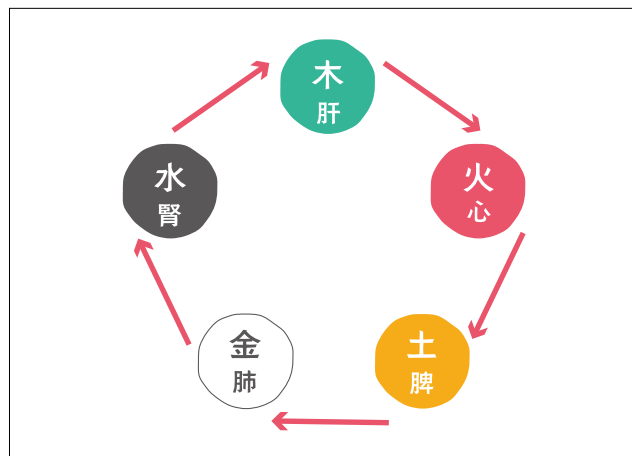


図1. 五行論

地球上のすべてのものは「木・火・土・金・水」のいずれかに分類されるという、中国古代哲学の考え方。中医学の診断や治療にはこの中でも「五臓」に当てはめて考えることが多い。水にあたる「腎」は「父母から授かった生命活動の源＝先天の精」を蔵しているとされている。これは、日本でいう命のろうそくのようなもので、加齢とともに減少していく。